

広島県立美術館

研究紀要

第22号

中央アジアのカード織りについて (1)

—広島県立美術館所蔵トルクメンの刺繍袋

およびウズベキスタン現地調査による— …………… 福田 浩子 1

資料紹介：南薫造の1930（昭和5）年の台湾日記と関連作品…………… 藤崎 綾 13

2 0 1 9

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.22

Card weaving in Central Asia: on Turkmen embroidery bags from the collection of
Hiroshima Prefectural Art Museum and Research in Uzbekistan *1*
FUKUDA, Hiroko Siddiqi

A Taiwanese stay diary in 1930 and related works of MINAMI Kunzo *13*
FUJISAKI, Aya

2019

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN



1-1



2-1

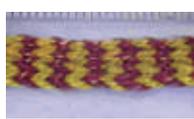


3-1

1-1、2-1、3-1 刺繍袋
(広島県立美術館蔵)



1-2



2-2



3-2

1-2、2-2、3-2の刺繍袋付属の紐(部分)



4

4、5 ウズベキスタンのカード織り

6 カード織りによる紐



5



6

中央アジア・ウズベキスタンのカード織りについて(1) - 広島県立美術館所蔵品およびウズベキスタン現地調査による -

福田 浩子

1 はじめに

広島県立美術館は、1996(平成8)年のリニューアルオープンに際し、3つの収集方針のひとつとして「日本を含むアジアの工芸」を掲げ、以来、作品収集と展示普及活動を継続してきた。コレクションは、ヴァリエーションに富んだアジアの工芸品を未だ網羅するものではないが、染織と金工の分野において、充実したいくつかのグループを認めることができる。

染織では、中央アジア、インド、インドネシアの3地域が主に挙げられる。中央アジアからは、ウズベクの刺繍布スザニ17点、ウズベクの民族衣装23点、トルクメンの民族衣装26点、旧ソ連領中央アジアからアフガニスタン、パキスタン、ペルシア等の各種の刺繍袋124点がある。インドでは、インド域内向けの更紗類および輸出更紗類42点、インドネシアでは、バリ島テンガナンの経緯緋グリーンシン22点を所蔵している。平成21年度、岩崎博氏より染織品192点の寄贈を受けるなどの結果、染織作品は478点となっている(表1)。

さて、1997(平成9)年、館蔵中央アジアの工芸コレクションの背景と現状を調査するために、旧ソ連領中央アジアの地を踏む機会を得、カザフスタン、キルギスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンを訪れることができた。その後は自費で赴き、美術館や博物館だけでなく、かつての雰囲気を残すバザールや伝統的な家屋、生活様式を見て歩いてきた。そうして勤務館である広島県立美術館の中央アジアの工芸コレクションに関する調査研究および現地調査などを通じて研究を継続してきた。

当館がこれらの作品を収蔵した当時、国内での中央アジアの民族衣装に関する研究は決して多くは

表1 染織作品地域別内訳

地域	作品数	民族あるいは地域・国名	作品数
西アジア	23	イエメン	2
		シリア	2
		ペルシア	19
中央アジア	174	ウズベク	89
		トルクメン	84
		キルギス	1
南アジア	102	ハザーラ	16
		パシュトゥーン	5
		パキスタン南部	4
		インド	77
東南アジア	104	ミャンマー	3
		ラオス	12
		タイ	2
		インドネシア	85
		フィリピン	2
東アジア	75	中国、雲南	11
		中国	1
		朝鮮半島	5
		日本	58
計	478		

※地域あるいは民族が不確定な作品が含まれるため、数字は概算である。



なかった。とはいえ、ソビエト時代の1978年には加藤定子氏によってタジクの民族衣装について、1981年には加藤氏と松本敏子氏のそれぞれによってトルクメンの民族衣装について、1985年には加藤氏によるトルクメンの民族衣装について等が報告されている。広島県立美術館では、1996年にはリニューアルオープンの開館記念展第2弾の特別展「アジアの染織展」の5章の一つとしてトルクメンとウズベクを中心とした「中央アジア」の展示を加藤九祚・定子両氏の監修の下で行い、1999年に特別展「トルクメン・ジュエリー シルクロードからの贈りもの」を開催した。所蔵作品展でも幾度となく中央アジアを様々な角度で取り上げ、テーマ展示を行ってきた。

中央アジアの染織品にはコート（チャパン）の袖口や裾、袋物の紐、天幕やラクダの帯など、さまざまな素材と用途で細幅の紐状織物がある。大きな本体の小さな一部を構成する紐状織物は一見すると脇役的な存在に感じられるかもしれないが、色糸の組み合わせや文様はかなりの種類が見られ、技法的にも平織、組紐、撚りをかけたロープ状の紐、そしてカード織りといった幅広さを見いだせる。本稿では、とくにカード織りに焦点を絞り、当館所蔵品に含まれるほんの数本のカード織りの紐について考察し、また、現代のウズベキスタンで行われている2つ穴カード織りを紹介したい。

2 カード織りとは

カード織りは木や骨、革や紙などで作られたカードの穴に経糸を通して、綜統の役割をなすカードを回してできた開口に緯糸を通して丈夫な紐状織物を作る技法である。

カード織りの歴史は紀元前に遡り、東南アジア、中国、ロシア、中央アジア、西アジア、北アフリカ、ヨーロッパとユーラシア大陸の広い地域で作られて来た。19世紀末にドイツのマルガレッテ・レーマン＝フィルヘスによるカード織りについての総合的な研究が発表され始め、以来、染織品の一分野としてカード織りが認識されるようになった。近年は、日本でもウズベキスタンのカード織り

についての言及が散見できるようになり、ひろいのおこ氏は「ウズベキスタンの紐から」で現地の紐について言及しⁱⁱ、鳥丸知子氏は「中国におけるカード織りの展開」のなかで2010年の調査内容を報告しているⁱⁱⁱ。

カードは、約100年前にレーマン=フィルヘスが最初に目にしたのが木製だったように、木製あるいは骨製、革製等が主流だったようだが、現代では紙製、プラスチック製のカードも普及している。意外な素材としては、南アジア、ヒマラヤのブータン王国では使用済みのレントゲンフィルムを再利用したカード（時には骨が写ったカードも見ることができる）が普及している^{iv}が、最近ではレントゲンはデジタル画像で撮影され、フィルム自体が入手難になってきたことから、フィルム製のカードはもはや貴重品だという。

カードに開けられる穴の数は、2つ、3つ、4つ、6つ、8つ…とバリエーションがあり、長方形や三角形、正方形や多角形と形状もさまざま、地域や民族によってカードの形態や穴の数、織りの技法はさまざまである。穴の数はたいていの場合、経糸の本数となる（経糸を通さない穴を残す技法もある）。英語ではcard weavingあるいはtablet weavingと呼ばれる。ウズベク語やタジク語ではチュラーズという。後述するように、現代ウズベキスタンではカードの穴の数は2つ、経糸1本をそれぞれの穴に通してカード織りが行われる。

3 広島県立美術館所蔵品にみるカード織り

館蔵品中、中央アジアの染織品にはコート（チャパン）類の袖口や裾、袋物の紐など、さまざまな細幅の紐状織物が含まれている。紐状織物は脇役的な存在ではあるが、色糸の組み合わせや文様はかなりの種類が見られ、技法的にも平織、組紐、撚りをかけたロープ状の紐、そしてカード織りといった幅広さを見いだせる。

館蔵品では、紐類をとくに多く含むのは刺繍袋コレクション124点である。このうち、カード織りと判断できたのは3点についてであった。

表2 広島県立美術館蔵品にみるカード織りの紐

No.	民族名	年代	サイズ (cm)	紐							管理 番号	
				幅 (cm)	長さ (cm)	経糸(本)			緯糸	素材		技法
						総本数	赤	黄				
1	トルクメン人エルサリ族	19世紀 中期	18.8× 14.8	0.6	45	14	7	7	赤	絹		HB-134
2		20世紀 初頭	16.5× 13.0	0.6-0.7	56	16	8	8	赤	絹	カード 織り (2つ穴)	HB-203
3		20世紀 初頭	15.5× 13.0	0.6-0.7	13	16	8	8	赤	絹		HB-208

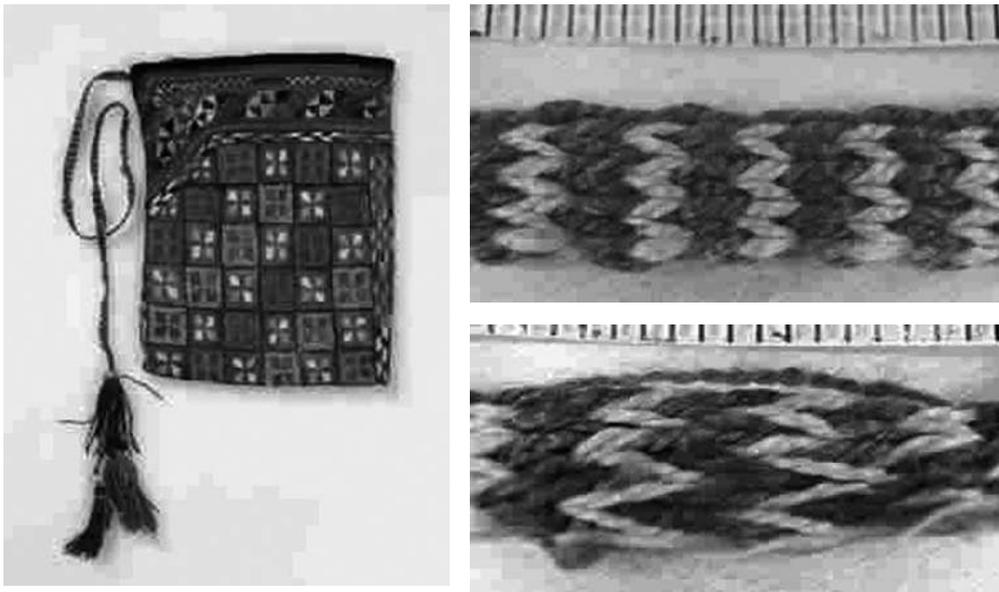


図1 表2-No.1刺繍袋とその紐 (HB-134)

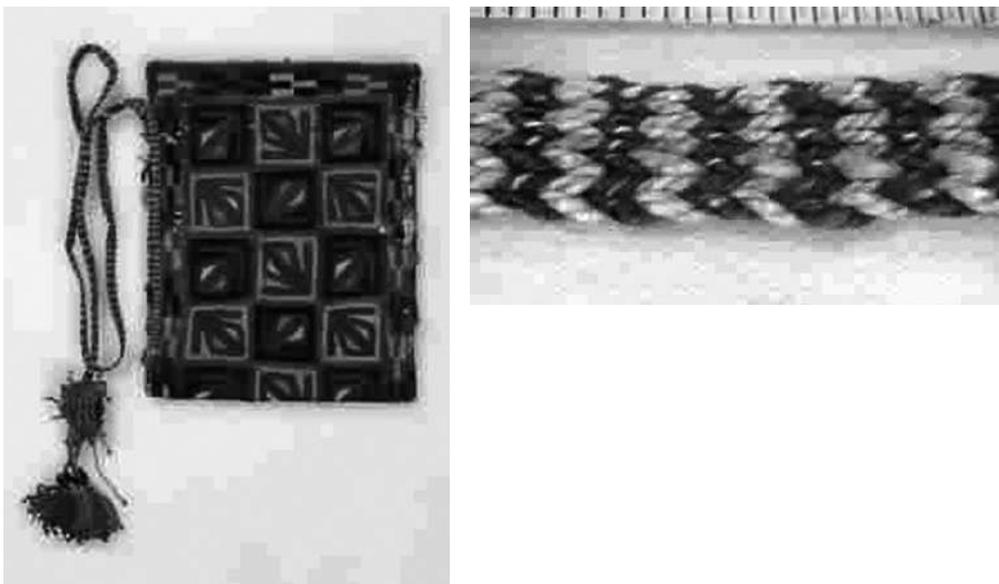


図2 表2-No.2刺繍袋とその紐 (HB-203)

No.1の刺繍袋は、赤色の木綿地に生成または白色の裏地をあて、絹糸でダブルチェーンステッチを用いて全面を刺繍し、開口部は経糸を指にかけるように緯糸で織りながら縫いつけて縁処理をしている。紐は刺繍糸と同じ糸を用い、赤7本、黄7本、計14本を経糸とし、赤糸を緯糸にする。この紐は2つ穴のカード織りで織られていて、赤と黄をそれぞれの穴に、通し向きは2枚を向かい合わせにする。一部のカードの回し方が途中でずれたのか、模様の出方が違う部分がある。紐先のフリンジの根元にはガラスビーズが通っている。

No.2は、プリントの布地に生成または白色の裏地をあて、絹糸でダブルチェーンステッチで布地が見えないほどびっしりと刺繍している。刺繍の主なモチーフは殻付きアーモンドで、2粒を左右対称に組み合わせたパターンである。紐はNo.1と同様に刺繍糸と同じ糸で、赤8本、黄8本、計16本の

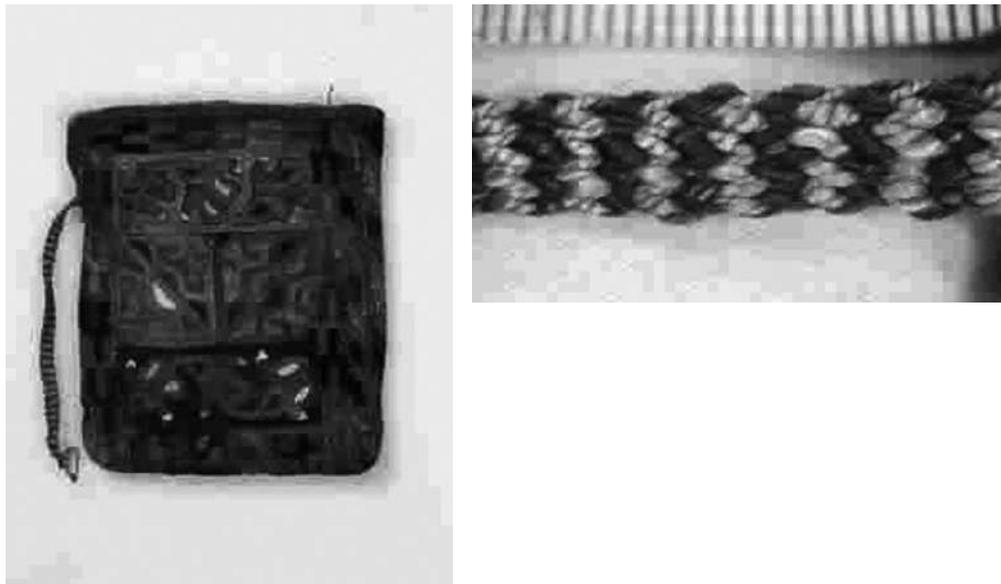


図3 表2-No.3刺繍袋とその紐 (HB-208)

経糸、赤色の緯糸、やはり2つ穴のカード織りで織る。紐の先にはフリンジの先からさらに2本のフリンジに分れている。それぞれのフリンジの糸端にはガラスビーズがついている。紐は切れて繋ぎ直しているの
で、フリンジは後補かもしれない。

No.3は赤色の布地に花柄プリントの薄オレンジ色の裏地をあて、絹糸でダブルチェーンステッチで全面刺繍している。No.2と同じく、刺繍のモチーフは殻付きアーモンドであるが、3粒で1パターンを構成する^{vi}。一部には芯糸に金を巻きつけたモール糸の刺繍も行われている。

これらの刺繍袋のカード織りによる紐はすべて赤と黄の組み合わせである。刺繍に使われる色彩は幅広いにも関わらず、この2色が確認できたが、他の色糸が使われた作例はきっとたくさんあるはずである。カード織り以外の技法で作られた紐には、単色のものもあれば、そうでないものもある。2色使いの紐は、赤と黄のほか、赤と緑、オレンジと紫、黄と緑など、色の差のある色彩の取り合わせを見ることができる。今回観察できたのはいずれも刺繍の小さな袋についた紐で、すべて赤色と黄色、カードの枚数は7~8枚であり、3本すべてにおいてカードの回転は一方方向で、反転した部分は見当たらなかった。同館の登録情報で

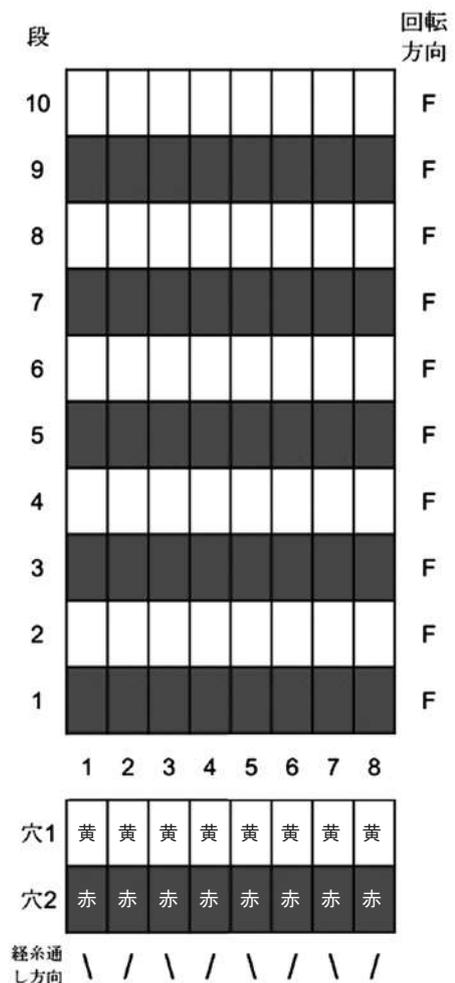


図4 No.3の紐のカード通し図と織り方

は、袋3枚ともトルクメン人エルサリ族に属する文様で、木綿地に絹糸で刺繍が施されている。経糸緯糸とも刺繍に使われている絹糸と同じようである。

観察結果から紐を再現制作する方法を示す(図4)。カードは一つの穴に黄色、もう一つに赤色を通す。糸を右から左へ通したカード、左から右へ通したカードを向かいあわせるように8枚で4セット並べて整経した。カードを180度回転させ、経糸が開口したところに緯糸を通し、また回転を繰り返し、紐を織ることができる(図5-6)。カードの向きを変えれば模様に変化をつけることもできる。

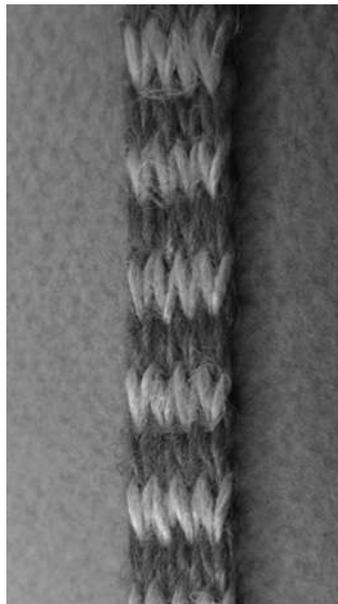


図5 サンプル
図4の通し方で一方方向に回転させて織ったもの



図6 サンプル
図4の5~8のカードをひっくり返して(180°回転)ずらした

3 ウズベキスタンの2つ穴カード織り



図7 ウルグート



図8 カード織り一式

2018年8月ウズベキスタンで、紐状織物チュラーズ制作の現場を見ることができた。前年のタシケント訪問時に、サマルカンド地方で紐状織物が作られているとの情報をタシケントの美術館学芸員から得ていたため、当初は同地が主な調査地となると予想して赴いた。しかし、サマルカンドのバザール(市場)で販売されている紐状織物は、サマルカンド近郊のウルグート、さらにウルグート近郊の村々で作られていることがわかり、幸いにも「本当の」制作者にたどり着いた。なお、通過地点となったウルグートは、刺繍布スザニのバザールが開かれているとガイドブックで有名な街であり、ある通りにはスザニなどの手工芸品の店が並んでいたが、刺繍布スザニが多く取引されることとして知られているが、執筆者が訪れた時は一本の通りに面していくつかの店舗が並んでいる程度で、活気にあふれたスザニのマーケットの様子は伺えなかった。現地の幾人もの協力を得て、最終的に実際の制作者、つまりウルグート・バザールに買い出しに来ていた女性にたどり着き、突然のことながら、自宅兼工房を訪問させてい



図9 糸はミシン糸を3本どり



図10 整形台は中庭に作られている



図11 整形台のもう片方の端

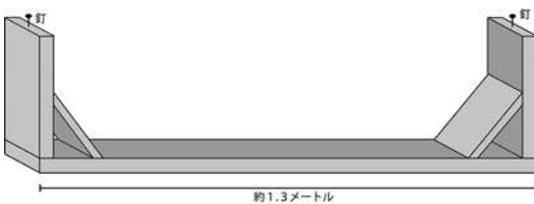


図12 機の構造

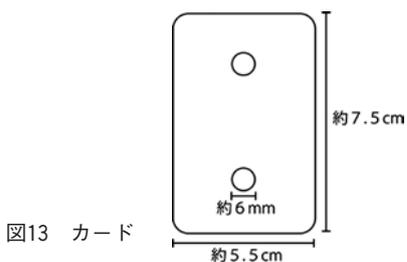


図13 カード

ただけることとなった。

その女性はウルグートから車で30分ほどの村に住み、自宅で紐を織り、ウルグートの仲買人に販売している。カード織りを実演していただき、お話を伺った。彼女は30年以上にわたって紐状織物を織り続けている。アメリカに渡った友人から織ってほしいと頼まれたのがきっかけだったという。

彼女の場合、紐状織物は、ウルグート・バザールに繋がる仲買人がイメージ写真を添えて注文してくる。デザインは実際の紐状織物ではなく、伝統的な経緋の織物などの写真が示され、織り手はそのイメージをカード織りのデザインに落とし込む、あるいは織り手自身が何かからインスピレーションを得て、デザインするという。スマートフォンのメッセージアプリを通じて、注文や写真が送られてくるというのが時代を反映している。図面は作らない。デザインは彼女の頭の中にある。

まず、経糸を準備する整経の工程である。カードは電話会社のプリペイドカードに穴を開けたもの(図13)。手のひらに収まる大きさで、適度な厚みと硬さがあり、かつ、四隅に丸みが取ってあるので理想的である。糸はコーン巻の木綿糸(図9)を使う。2つ穴に、白・白、赤・赤、白・赤という3種類の色の組み合わせで、必要枚数を揃えたカードの束に3本どりの経糸をまとめて通し、あらかじめ壁に打ち込んだ釘を利用して6メートルの経糸を整経する(図



図14 機

10-11)。一往復するたびにカード1枚を残すことをカードの枚数だけ繰り返す、すべてのカードに経糸が通ったら、カードの順序と糸の通し方を整えて整経が終了する。

カード織りの機は、図12のようなコの字型の枠で、幅1.3メートル、両端の釘に括って束ねた経糸の端をかけ、反対側の釘に経糸の残りを巻きつけて固定する(図14-15)。

両端を機に固定し、カードを回転させ、緯糸を入れ、緯糸を打ち込み、またカードを回転させて、を繰り返す(図18-20)。経糸を交差させる時にはカード2枚1組を隣の2枚1組と入れ替える(図20)。緯糸の打ち込み具はナイフ状で、カードを揃える時に頻繁に当たるため、カードの側面は凹んでいた。一般的な織物の仕組みと同様、打ち込み具は重い方が緯密度を高くでき、しっかり織ることができる。緯糸は2本どり、両糸端を挟み込んで織り始める。手の早い人は1日で6メートル1本を織ってしまうという。彼女の家族や、彼女の村でも他にも同様の織りをしている人たちがいて数十人に及ぶとのことであった。現代ウズベキスタンで流通しているカード織りの紐の多くはサマルカンド周辺で作られていることが想像されるが、タシケント、テルメズ等でも織られているとの言及もある。

ウズベキスタンでも刺繍布スザニや民族衣装チャパンなどの人気の高い派手な染織品に比べ、それらの一部として存在する紐は脇役に過ぎず、染織品としてきちんと認識されていない。今回、外国人が紐状織物を見にやって来たことは彼女やその家族にとって励みになったようでたいへん喜んで迎えていただいた。

今回入手したカード織りの紐については、糸の通し図や織り図は作り手の頭の中にあって、紙や図面としては存在しないが、あえて織り図を作成してみた(図21-23)。カードを入れ替えることで経糸が交差し、図のような表現となることは興味深く、文様発展の可能性を含んでいるように思う。

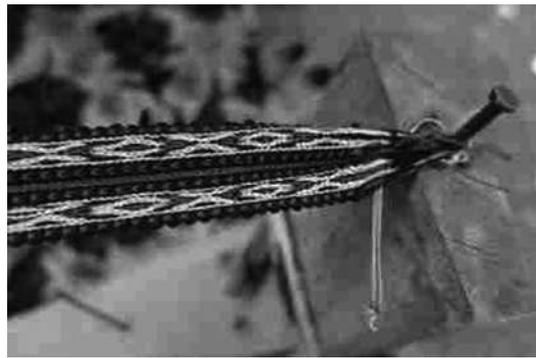


図15 織り始め 挟まれているのはマッチ棒



図16 櫛で経糸を保持



図17 カードの束を上側から見たところ



図18 カード織りで紐を織る



図19 ナイフ状の打ちこみ具



図20 カードを入れ替える

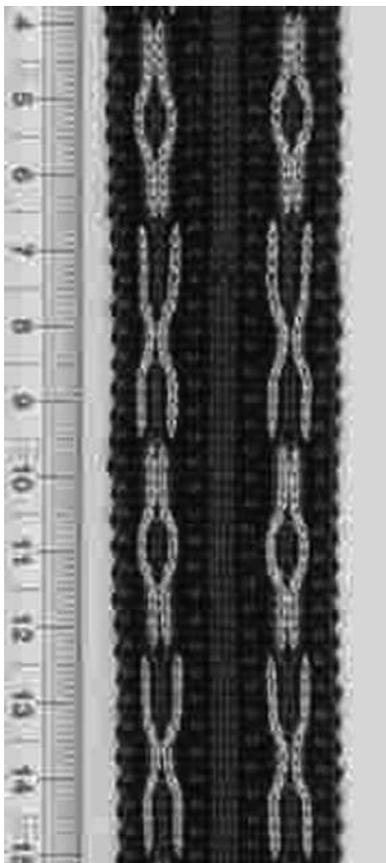
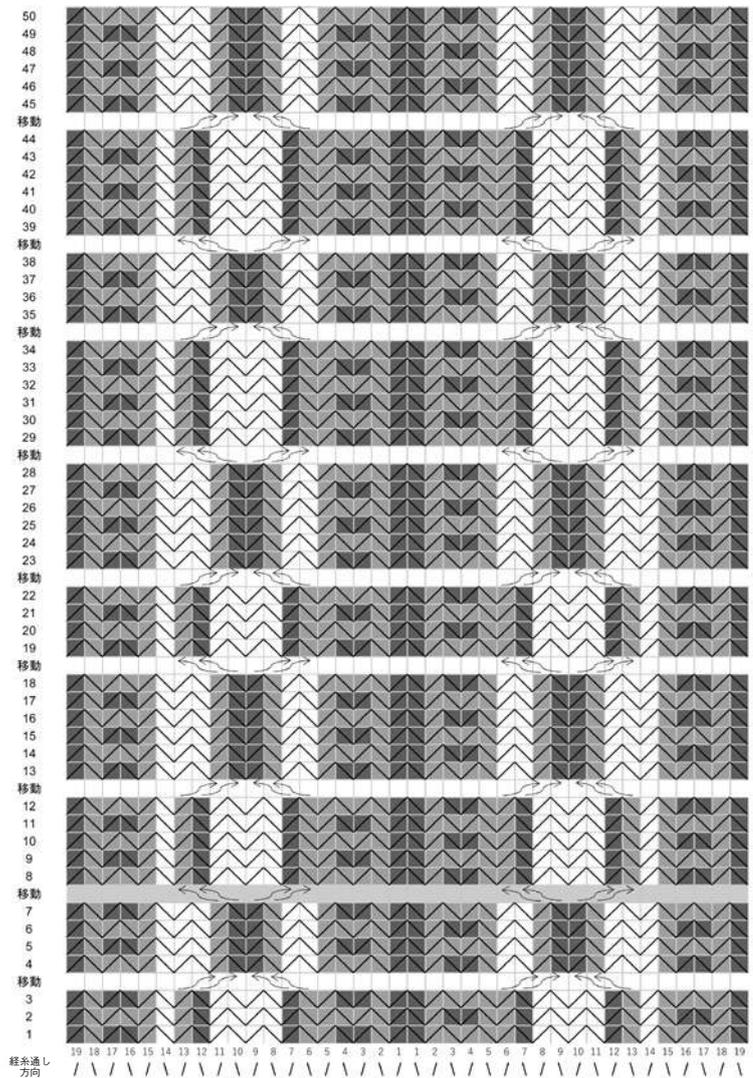


図21 紐と織り図1



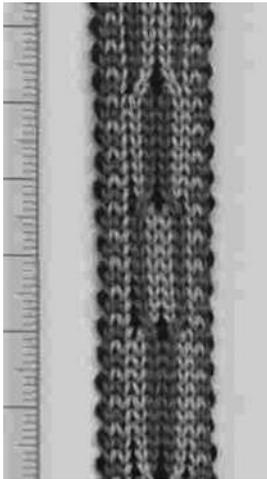


図22 紐と織り図2

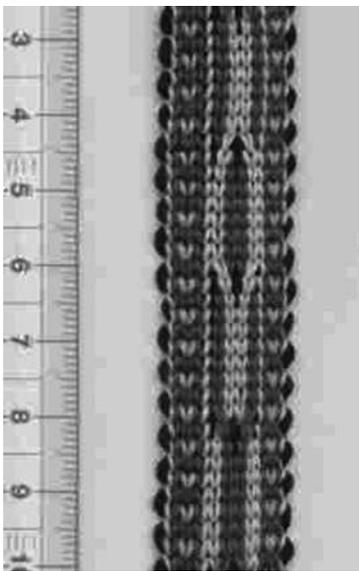
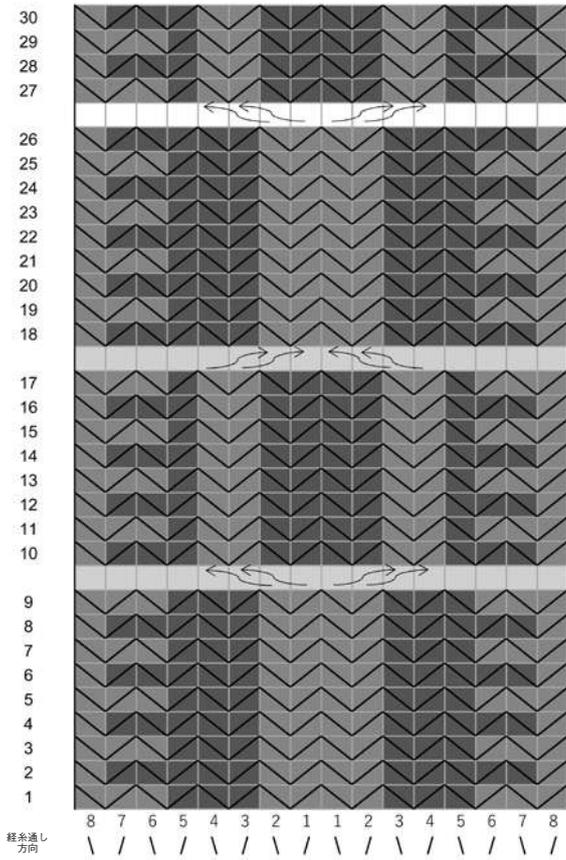
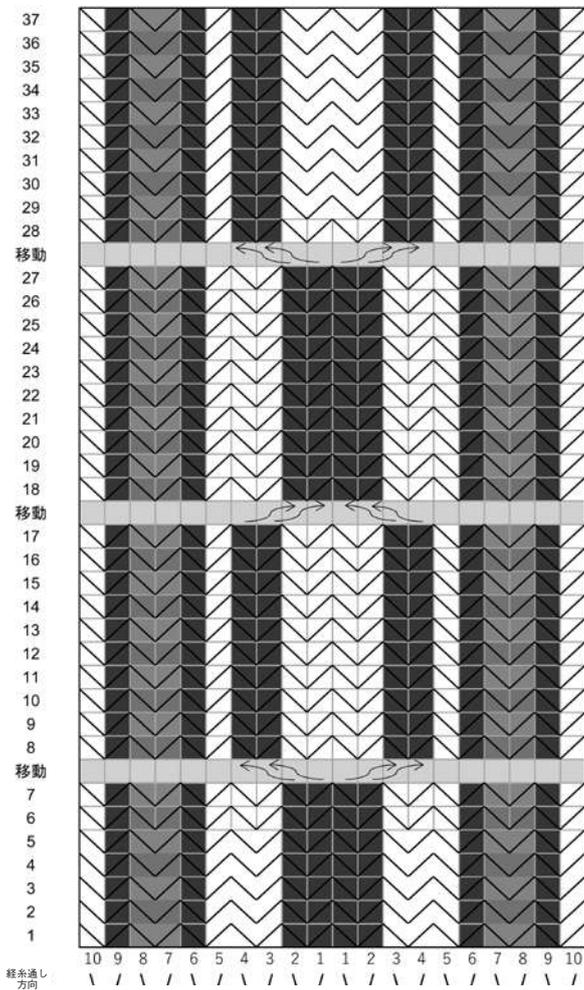


図23 紐と織り図3



4 まとめ

中央アジアの紐は、織りではカード織りと平織りによる紐があり、それ以外にも組紐、撚紐も見られ、技法は多岐にわたる。今回、カード織りに着目して調査を行ったが、他の紐についても網羅することで、この地域の紐の使い分けや技法の違いが明らかになる可能性がある。また、紐ではないが、チャパン（長丈のコート）等の縁に織りながら縫い付ける縁飾りジャヘクがある。これは一見するとカード織りの紐を縫いつけたようにも見えるものであるが、紐状織物の緯糸が布端の裏側に渡りながら織られているので、後付けしたわけではない。これらの技法についても、いつか制作現場を調査したいと思う。

(広島県立美術館学芸課長)

-
- i 日下部啓子「カード織を理解するために (1) カード織再発見の時代」、『月刊染織 a』No.302、pp.59-62、染織と生活社、2006年5月
 - ii ひろいのおこ「ウズベキスタンの紐から」『旅する布』pp.80-83、美学出版、2017年 (2013年再録)
 - iii 鳥丸知子「中国におけるカード織りの展開」名古屋市立大学大学院 芸術工学研究科編『芸術工学への誘い』vol.20、pp.51-57、名古屋市立大学、2015年
 - iv 福田浩子「ブータンの工芸調査ノート」、『広島県立美術館研究紀要』第19号、pp.9-16、広島県立美術館、2016年
 - v 福田浩子「中央アジア・トルクメン人エルサリ族のジュドゥルについて-広島県立美術館所蔵刺繍袋コレクションに見るアーモンド(バダム)文様-」、『広島県立美術館研究紀要』第13号、pp.31-44、広島県立美術館、2010年
 - vi 同上

謝辞

平成9年度、公益財団法人ポーラ美術振興財団調査研究助成に「中央アジアにおける工芸文化史の研究」が採択されたことが契機になり、初めて旧ソ連領中央アジアのうち4カ国を訪れ、その後は勤務館所蔵品と現地調査を基盤として細々と研究を継続してきましたが、平成30年度には「中央アジアにおける紐状織物(チュラーズ)についての研究」に対し同財団より再び研究助成をいただき、充実した現地調査を行うことができました。また、先見の明により中央アジアの工芸作品の収集に尽力されて執筆者の研究の契機を作られた村上勇氏をはじめ、国内外の所蔵家・所蔵館・研究者など関係者のご理解とご協力により実物調査を、中央アジア各地の作家や工房関係者など数多くの方々の温かい歓待を受けながら、そして、家族の全面的協力により現地での制作状況調査を行うことができました。ここに記して、心より感謝申し上げます。

写真・図

カラー図1-1~3-2および図1-3の作品はすべて広島県立美術館蔵。カラー図1-1、2-1、3-1および図1-3はオーシマ・スタジオ撮影、図19はPh. D. Hedayatullah Siddiqi撮影、それ以外はすべては福田浩子撮影・作図。

その他の主要参考文献

山梨幹子『紐を織る スカンジナビアの暮しに生きるバンド織りとカード織り』復刊ドットコム、
2016年（初版：美術出版社、1978年）

Peter Collingwood, *The Techniques of Tablet Weaving*, Robin & Russ Handweavers, 2002（初版：
Faber and Faber, 1982）

Candace Crockett, *Card Weaving*, Interweave Press, 1991.

日下部啓子「カード織を理解するために（3）世界のカード織機の展開」『月刊染織 a』No.304、pp. 54
-58、染織と生活社、2006年7月

日下部啓子「カード織を理解するために（5・最終回）続・カード織の起源と歴史—ユーラシア大陸
におけるカード織技法の広がり」『月刊染織 a』No.306、pp. 59-63、染織と生活社、2006年9月